

Title	有理数体上の4元数環の基底と極大整数環
Author(s)	伊吹山, 知義
Citation	数学. 24(4) P.316-P.318
Issue Date	1972
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3060
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

有理数体上の4元数環の基底と極大整数環

伊吹山 知義 (東大理)

有理数体上与えられた偶数個の素点が分岐する4元数環, およびその1つの極大整数環の基底を具体的に求めてみた. 本質的には新しい内容を含むものではないが, このようにはっきりと述べてある文献も知らないで, 何かの参考になればと思い, 書きとめておくことにした. 結果は次の通り.

定理. ∞ が分岐しないとき, 相異なる偶数個の正の素数 p_1, \dots, p_r を指定するとき, $m = p_1 \cdots p_r$ とおく.

$q \equiv 5 \pmod{8}$ かつ $p_i \neq 2$ なる $p_i | m$ に対して

$$\left(\frac{q}{p_i}\right) = -1$$

となるような正の素数 q をとり,

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = m, \quad \beta^2 = q, \quad \alpha\beta = -\beta\alpha$$

とおくとこれはちょうど p_1, \dots, p_r のみが分岐する4元数環になっている.

$a^2 \equiv m \pmod{q}$ なる整数 a をとるとき,

$$\mathfrak{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

が D の1つの極大整数環を与える.

以上で q の存在は Dirichlet の素数定理. また a の存在は, q のとり方より $(m/q) = 1$ が容易(後述).

∞ が分岐するとき, 相異なる奇数個の正の素数 p_1, \dots, p_r を指定し, $m = p_1 \cdots p_r$ とおく. あとは上記の ∞ が分岐しない場合の条件のうちで, すべて $m \rightarrow -m$, $q \rightarrow -q$ とおけばよい. すなわち, q は,

$$-q \equiv 5 \pmod{8}, \quad p_i \neq 2 \text{ に対して } (-q/p_i) = -1$$

を満足する正の素数

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = -m, \quad \beta^2 = -q, \quad \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$a^2 \equiv -m \pmod{q} \text{ で}$$

$$\mathfrak{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

注意 1. Hasse の定理より, \mathbb{Q} 上の 4 元数環は, $M_2(\mathbb{Q})$ を除いて, 上に与えたもの以外に存在しない. また類数 1 の 4 元数環, 特に不定符号 4 元数環では極大整数環は内部自己同型を除いて, 上のもので一意的に決まる.

注意 2. $\mathbb{D} \supset \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\alpha + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\alpha\beta$

注意 3. 特殊な場合には, より簡単な基底のとり方がある. 例えば

$p \equiv 3 \pmod 4$ (素数) および ∞ の 2 点が分岐するとき

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = -p, \beta^2 = -1, \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\frac{1+\alpha}{2} + \mathbb{Z}\frac{\beta(1+\alpha)}{2}$$

2 および ∞ が分岐するとき

$$D = \mathbb{Q} + \mathbb{Q}\alpha + \mathbb{Q}\beta + \mathbb{Q}\alpha\beta$$

$$\alpha^2 = \beta^2 = -1, \alpha\beta = -\beta\alpha$$

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\alpha + \mathbb{Z}\beta + \mathbb{Z}\frac{1+\alpha+\beta+\alpha\beta}{2}$$

ととることができる.

証明. 以下, 不定符号 4 元数環の場合のみ証明する. (定符号でも全く同様)

1. D が指定された分岐を持つこと.

Hilbert 記号を使えば簡単に検証できるが, ここでは直接証明する. $\xi = x + y\alpha + z\beta + w\alpha\beta \in D$ に対して, (被約ノルム) $n(\xi) = x^2 - my^2 - qz^2 + mqw^2$ とおく. $D_p = D \otimes_{\mathbb{Q}} \mathbb{Q}_p \cong \xi_p$ に対して,

$$D_p \text{ が division } \iff n(\xi_p) \neq 0 \text{ for } \forall \xi_p \neq 0$$

(0) もちろん ∞ は分岐しない.

(1) 一般に

$p \neq 2$ なら $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$ が不分岐 2 次拡大

$$\iff (q/p) = -1, (q, p) = 1$$

$p = 2$ なら $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$ が不分岐 2 次拡大

$$\iff q \equiv 5 \pmod 8.$$

よって上の q および $p|m$ に対して, $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$ は不分岐 2 次拡大, m は \mathbb{Q}_p の素元だから, これらでできる \mathbb{Q}_p 上の巡回多元環 D_p は division である.

$\therefore p|m$ なら, D_p は division

(2) $p \nmid m$ に対して, $n(\xi_p) = 0, \xi_p \neq 0$ なる解, $\xi_p \in D_p$ があることをいう.

$p \nmid m, p \neq 2, q$ で $(q/p) = 1$ のとき, $x^2 - q = 0$ なる $x \in \mathbb{Q}_p$ がある.

$p \nmid m$ で $p = 2$ または $p \neq q$ かつ $(q/p) = -1$ なら, m が \mathbb{Q}_p の単数, $\mathbb{Q}_p(\sqrt{q})/\mathbb{Q}_p$ は不分岐 2 次拡大より, 局所類体論によって, $x^2 - qy^2 = m$ なる解 $x, y \in \mathbb{Q}_p$ がある. よって $p \nmid m, p \neq q$ のときは p は分岐しない. $p = q$ の時, Hasse の和定理によって分岐しないことは以上よりあき

らかだが直接証明する.

$(m/q) = 1$ なら, $x^2 - m = 0$ なる $x \in \mathbb{Q}_p$ があるので分岐しない. よってこれを示す.

$p_i | m, p_i \neq 2$ の時

$$\left(\frac{p_i}{q}\right)\left(\frac{q}{p_i}\right) = (-1)^{\frac{p_i-1}{2} \cdot \frac{q-1}{2}} = 1$$

$$\therefore \left(\frac{p_i}{q}\right) = -1$$

$p_i = 2$ の時

$$\left(\frac{2}{q}\right) = (-1)^{\frac{q^2-1}{8}} = -1$$

よって

$$\left(\frac{m}{q}\right) = \left(\frac{p_1}{q}\right) \cdots \left(\frac{p_r}{q}\right) = (-1)^r = 1.$$

よって D はちょうど指定された分岐をもつ \mathbb{Q} 上の 4 元数環である. またこれで $a^2 \equiv m \pmod q$ なる a の存在もいえた.

2. \mathbb{D} が D の 1 つの極大整数環を与えること.

$\mathbb{D} \supset 1$, また \mathbb{Z} 上有限生成かつ D の \mathbb{Q} 上の基底を含む. よって \mathbb{D} が整数環であることをいうには, 部分環であることをいえばよい. また極大整数環の判別式は, 一般論より, $m^2\mathbb{Z}$ になるから,

$$\mathbb{D} \text{ が極大 } \iff \mathbb{D} \text{ の判別式} = m^2\mathbb{Z}.$$

これらを

$$\mathbb{D} = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\frac{1+\beta}{2} + \mathbb{Z}\frac{\alpha(1+\beta)}{2} + \mathbb{Z}\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

について確かめればよい.

	ω_1	ω_2	ω_3	ω_4
ω_2^2	$\frac{q-1}{4}$	1	0	0
$\omega_2\omega_3$	$\frac{-a(1-q)}{4}$	$\frac{a(1-q)}{2}$	$\frac{1-q}{2}$	$\frac{q(q-1)}{4}$
$\omega_2\omega_4$	a	$-a$	-1	$\frac{q+1}{2}$
$\omega_3\omega_2$	$\frac{a(1-q)}{4}$	$\frac{a(q-1)}{2}$	$\frac{q+1}{2}$	$\frac{q(1-q)}{4}$
ω_3^2	$\frac{m(1-q)}{4}$	0	0	0
$\omega_3\omega_4$	$-m + \frac{(1-q)(a^2-m)}{2q}$	$a^2 - \frac{a^2-m}{q}$	a	$\frac{a(1-q)}{2}$
$\omega_4\omega_2$	0	a	1	$\frac{1-q}{2}$
$\omega_4\omega_3$	$\frac{(q-1)(a^2-m)}{2q}$	$\frac{a^2-m}{q} - a^2$	$-a$	$\frac{a(1-q)}{2}$
ω_4^2	$\frac{a^2-m}{q}$	0	0	0

$$\omega_1=1, \omega_2=\frac{1+\beta}{2}, \omega_3=\frac{\alpha(1+\beta)}{2}, \omega_4=\frac{(a+\alpha)\beta}{q}$$

とおく. 念のため前頁に表をかかげておく. 表の右側は左の数を ω_i の 1 次結合で表わした時の係数を示す.

前表によって, $a^2 \equiv m \pmod{q}$, $q \equiv 5 \pmod{8}$ に注意すれば, これらの係数がすべて整数であることより, \mathfrak{D} は部分環であることがわかる. また, $\text{tr}(\omega_1)=2$, $\text{tr}(\omega_2)=1$, $\text{tr}(\omega_3)=\text{tr}(\omega_4)=0$ に注意して,

$$(\mathfrak{D} \text{ の判別式}) = \begin{vmatrix} 2 & 1 & & 0 \\ 1 & \frac{q+1}{2} & 0 & a \\ 0 & 0 & \frac{m(1-q)}{2} & -m \\ 0 & a & -m & \frac{2(a^2-m)}{q} \end{vmatrix} = -m^2$$

よって \mathfrak{D} は極大整数環である. (証明おわり)

(1972年1月24日提出)